「横浜の地下に宝物」

文化財保全に尽力、寄付も

故郷の横浜に恩返しをしようと、開港期以降の文化財保全に尽力する男性がいる。菓子販売会社の3代目、山本博士さん(44)＝横浜市西区。横浜の歴史にちなんだ多彩な菓子を販売する一方、大学院で遺構の保全について学び、今春修了。「歴史に親しんで故郷に愛着を持ってほしい」との願いを込めて寄付を続けるなど、次世代に〝宝物〟を残そうと奔走している。（蓮見　朱加）

菓子販売会社・山本さん

勝海舟が設計した神奈川台場、明治時代に横浜を走ったおか蒸気、広く知られる「ペリー提督横浜上陸の図」に描かれた玉楠の木…。洋菓子店「モンテローザ」で知られる「三陽物産」では、横浜の歴史に着想を得たサブレやバームクーヘンなど10種類以上の菓子を販売する。いずれも山本さんの代になって始めた。多彩な写真とともにモチーフとなった歴史を紹介するリーフレットを同封するなど、横浜の文化に関心を持ってもらえるよう趣向を凝らす。

原点は、自らの生い立ちにある。同市中区で生まれ、市立本町小学校を卒業。同校は日本初のガス会社として1872（明治5）年に開業した「横浜瓦斯会社」の跡地に立ち、周辺には横浜税関や県庁、横浜市開港記念会館など歴史的建造物が立ち並んでいた。横浜の歴史と文化を、いつも身近に感じてきた。

関東大震災や大空襲などで都市機能がまひするほどの被害を受けるたび、開港期の歴史的な遺構の上に新しい都市が形成されてきたのが横浜の特徴でもある。「横浜の地下にはまだ、宝物が埋まっている」と山本さん。自身を育んでくれた歴史と文化への恩返しとして、「古いものを大切にする文化を育てたい」と強調する。

横浜の歴史にちなんだ菓子を販売し、文化保全に尽力する山本さん＝三陽物産

その思いから、売り上げの一部を市内を中心に文化保存活動に取り組む団体に寄付し続けてきた。昨年7月には、母校の地下に眠っていた明治時代の遺構が校舎の増築で解体されると知り、保存費用として500万円を寄付。遺構は円筒形のガスタンクを支える赤れんが造りの基礎部分で、現在は一部が横浜都市発展記念館（同区日本大通）の中庭に展示保存されている。

ただ、「文化財は、あった場所に残し続けてこそ意味がある」というのが持論。博物館で「保存」するだけではなく、実際に使ってまちづくりや教育に生かすなど文化財活用を最優先に考える「保全」の重要性を訴える。2012年には、横浜市立大大学院に入学。社長と大学院生の〝二足のわらじ〟で、地下に眠る文化財を生かしたまちづくりについて研究し、論文を書き上げて修士号を取得した。

「より多くの人に歴史や文化の保全活動に興味を持ってもらえるよう、大学や企業、地域の人々と積極的に連携していきたい」。都市開発で歴史的な遺構を失わないためにも、大学院で学んだ専門知識と、ビジネスで培った現場感覚やアイデアを生かしていくつもりだ。